

坂口安吾

エゴイズム小説論





# エゴイズム小論



住友邦子誘拐ゆうかい事件は各方面に反響をよんだが、童話作家T氏は社会一般の道義の頹たい廃はいがこの種の悪の温床であるといい、子供たちが集団疎開によって人ずれがしたのも一因だという。朝日の投書欄では、父親の吉右衛門氏が信州の温泉に遊んでおつて、俺が帰ったところで娘が戻るわけでもないとうそぶいて帰京しなかつたことなど、それ自体がこの事件の真相を語っており、住友邦子は住友家の娘であるよりも誘拐犯人の妹に生れた方が幸

福であつたのだと言っている。これらはいずれも誘拐という表面の事件を鵜呑みにしただけの批判で、この事件の眞の性格を理解していないようだ。すべて社会に生起する雑多な事象が常にこの種の安易低俗な批判によって意味づけられ、人性や人の子たるものの宿命の根柢から考察せられることが欠けているのは、敗戦自体の悲劇よりもさらに深刻な悲劇であると私は思う。道義の頹廢などと極<sup>き</sup>り文句で片づけるのは文学者の場合は特に罪悪的な安易さであろう。

この事件の犯人は彼の誘拐したあらゆる少女に愛され

ているのである。一様に「やさしいお兄さん」であるという。そしてなぜ愛されているかというところ、この犯人は元来金が欲しかったわけではないので、純一に少女を愛していたわっており、そのために己れを犠牲にしている。自分は食わずに少女には食べさせてやり、野宿の夜は少女のために終夜蚊を追っているのである。ここにこの事件の特異な性格が存しておるので、犯行それ自体は利己的なものであっても、少女に対する犯人の立場は自己犠牲をもって一貫され、少女の喜びと満足が彼自身の喜びと満足であったと思われる。彼は半年いっしょに暮らし

た潔子には、家へ帰りたければ帰してあげると言っていたというが、すでに少女の帰りたがらないことを見越しての自信からとはいえ、本心からのいたわりもあつたに相違ない。彼は強制していない。潔子は御飯をたいてお握りをつくってくれたが、邦子は炊事を知らなかつた。そういう相違に対しても、自分の便利のために邦子と潔子と同じ働きを強要することはせず、少女の個性に即して自分の方を順応させ、自己を犠牲にして意とせぬだけの本来の性格をもっているのである。

こういう犯人にかかつては、潔子や邦子の頭の悪さ、

とか、世間知らず、ということによる説明は意味をなさない。あらゆる少女が誘拐せられてむしろ充たされ、犯人を慕いなつかしむに相違ない。

家庭は親の愛情と犠牲によって構成された団結のようだが、実際は因習的な形式的なもので、親の子への献身などは親が妄想的に確信しているだけ、かえって子供に服従と犠牲を要求することが多いのである。一般の母親は子供の個性すら尊重せず、A子の長所をもってB子をしていましめているもので、盲目的に子への献身や愛情を確信しているだけ始末の悪い独裁者であると知るべきであ

る。

何事によらず、真実エゴイストでないということは、究極における勝利であるにしても、この現世には容れられない。彼らの自己犠牲は現世の快樂を否定しているものではあるが、その意味においてはみずから充たされており、現世の苦痛は必ずしも、彼らの苦痛ではない。しかし彼らは世の秩序から迫害される。キリストがそうであつた。釈迦もそうだ。彼らの道はけいきよく荊棘と痛苦にみだされているが、究極において彼らは「勝つ性格」にある。ゴツホもゴーガンも芭蕉もそうだ。芸術のために彼らの

現世に課せられたものは献身と犠牲であつた。

すべて偉大なる天才たち、勝利者たちはエゴイストではなかつた、ということが出来る。

しかし我々凡夫の道、一般世間人の道はあべこべで、社会秩序や共同生活の理念はエゴイストでないことや自己犠牲のごときものを根幹としておらず、他に害を与えぬ範囲において自己の欲望の満足、現世の悦楽をみたすことを基本としているものなのである。キリスト教徒はキリストの苦痛をみずから行うことではなく、キリストの犠牲において彼らの現世の幸いが約束せられているの

だ。我々はキリストが最高の人格であることを知っている。とはいえ、我々すべてがキリストのごとき人格であらねばならず、我々の日常生活にキリストのごとき自己犠牲が要求せられたなら、我々は悲鳴をあげるのみならず、反抗し、革命を起こすにきまつている。最高の人格やモラルは我々の秩序にとっては異常であり、その意味において罪悪と異るところはない。我々の秩序はエゴイズムを基本につくられているものであり、我々はエゴイストだ。

私は十数年前に一人の女を知っていた。人妻であった

が千人の男を知りたいという考えをもっており、大学生などと泊まり歩いていた女で、そのうちに離縁され花柳病になって行き場に窮して私たちのアパートの一室へ転がりこんできたので、自分の欲望のため以外には人のことなど考えることのない女であるから、男にも女にも友達がなく、行き場がなかったのである。私たちのアパートというのは東京ではなく、ある地方の都市で、私はくされ縁の女とそんなところへ落ちのびてきて人は（私は）なんの為に生きるのであらうかと考えて、その虚<sup>むな</sup>しさと切なさに苦悶していた。私は毎日図書館へ行って、仕方

なしに本を読んでいた。自分が信頼されず、何か書物の中に私自身の考えごとが書かれていないかと、しかし、私は本をひらいてボンヤリするだけで本も読む力がなかったのだ。ころがりこんできた女は花柳病の医者へ通っていたが、その医者をお説いて失敗したそう、ダンスホールへ毎日男をさがしに行き、毎日あぶれて帰ってきて、ひとりの寢床へもぐりこむ。その冷い寢床へもぐりこむ姿がまるで老婆のようで色気というものが微塵もないので、私は暗然たる思いになったものだ。

私はそのとき思った。男女の肉体の場ですら、この女

のように自分の快樂を追うだけということとは駄目なのだ、と。マノン・レスコオとか、リエゾン・ダンジュルーズの侯爵夫人のごとき天性の娼婦しょうふうは、美のため男を惑わすためにあらゆる技術を用い、男に与える陶醉の代償として当然の報酬をもとめているだけの天性の技術者であり、そのため己れを犠牲にし、絶食はおろか、己れの肉慾の快樂すらも犠牲にしているものなのである。かかる肉慾の場においても、娼婦型の偉大なる者はエゴイストではないのである。エゴイストは必ず負ける。家庭がかかる天性の娼婦に敗れ去るのはいかんとも仕方がな

い。

芸術の世界もまたそうだ、エゴイストであつてはいけない——私はそのころから、エゴイストということに今もなお憑かれていたのだが、今もなお私には皆目わからないのである。私は無償の行為ということを思ひつづけてきたばかりで、今もなお私に何もわからないのは無理はない、思う世界ではない、行なう世界なのだからだ。

人は道義頽廃という。だが、彼らの良しとする秩序とはいったい何物であるのか。行きくられた旅人を泊めてもてなしてやったから美談だという。この旅人が小平のよ

うな男で、親切に泊めたばかりに締め殺されたらどうするつもりなのだ。フランスの童話にあるではないか。赤頭巾という可愛い親切な少女は森のお婆さんを見舞いに行つて、お婆さんに化けていた狼おおかみに食べられてしまふ話が。だから親切にするなというのではなく、親切にするなら小平や狼に殺される覚悟でやれ、ということだ。親切にしてやったのに裏切られたからもう親切はやらぬという。そんな親切は始めからやらぬことだ。親切には裏切りも報酬もない。小平や狼の存在が予定せられ、親切のおかげで殺されても仕方がないという自覚の上に成

り立っている絶対の世界なのである。

いったん裏切られれば崩れてしまうような親切を美談だといい、道義顔廃嘆くべしという、それ自体浅はかなるエゴイズムではないか。闇やみの女は自由と放恣ほうしをはきちがえている困った代物しろものだというのだが、家庭を呪い自由をもとめて飛び出すのは闇の女には限らない。出家遁世とんせいも同じことではないか。闇の女になるには坊主になるよりもっと苦しい一線を飛び越す必要がある。出家遁世はほめてくれる人はあるが、闇の女は世の指弾を受けるばかりである。諸君は罪を知っているか。罪とは何ぞや。

貞操を失う女は魂の純潔も失う、と。しかり。家庭に安住する貞淑にして損得の鬼のごとき悪逆善良なる奥方を見よ。魂の純潔などはない。魂の問題がないのである。

ラスコリニコフは淫売婦にひざまずく、彼女は汚辱にまみれているがその魂は一滴の淫蕩いんとうの血にも汚されていない、と。そして偉大なる罪にひざまずくのである、と。私はそんな甘ったるいことは考えていない。私の知るソーニヤやマリヤはみんな淫蕩の血にまみれ、そして嬉々としているのである。私のソーニヤは踏みつけられたり虐げられたりはしておらず、ノラののごとくにとびだして、

しかし汚辱に向かつてみずからとびこんできたのである。まさしく自由と放恣とはきちがえているのである。

だがこの世には眞実自由なるものも、眞実放恣なるものも存在してはいない。自由というものがいかに痛苦にみたされたものであるかは、我々芸術にたずさわるものが身にしみて知っている。芸術の世界においてはあらゆる自由が許されておるので、否、可能なあらゆる新しきもの、いまだ知り得ざるものを見出し創つくりだすことをその身上としているのである。才能には何の束縛もない。だがみずからの才能において自由であり得た芸術家など

は存在せず、眞実自由を許され、自由を強要されたとき（芸術は自由を強要する）人は自由を見いだす代わりに束縛と限定を見いだすのである。

私が戦時中囑託をしていた某映画会社では、演出家たちは組合制度だか順番制度だかそんな風なものをつくつて、各自の才能の貧困をそれによって救済するような組織をつくっていたようであるが、順番制度というような才能の分配が行なわれるようになれば、なるほど楽であろう。秩序とは万事かくのごときものであり、才能の自由競争は組合違反とくる。芸術の世界においてはかかる

秩序の馬鹿らしさがわかるけれども、一般社会においてはそれがわからぬのである。

放恣とてもそうである。人を裏切る者はみずからもまた裏切られる。権謀術数、可能なあらゆる悪策鬼略にみずから傷つき、裏切るゆえに裏切られ、戦国時代の豪傑どもも保護の上で束縛され安眠したいと思うようになる。どんな卑劣な手段を用いても勝てばよいという宮本武蔵の剣法が衰え、形式主義の柳生流が謳歌おうかせられるに至るのも、豪傑どもが剣道本来の激しさに堪え得なくなるのである。かくて虚妄きよもうの正義は誕生する。

ゼネストが他に迷惑を与えることによって反感を買う。しかし要求の当然な権利は認めないわけに行かない。エゴイズムはエゴイズムによって反逆され復讐されるのである。道義の頹廃を嘆くことのエゴイズムも同じこと、いかに嘆いてみたところで夫子ふうしみずからの道義なるものエゴイズムをさとらなければ笑い話にすぎないだろう。闇の女も出家遁世も単にエゴイストにすぎないが、要するにエゴイズムはエゴイズムによって反逆される。仕方のないことではないか。家庭や秩序の永遠なる平和などというものはありうるものではない。

芸術はいかなる時にも永遠なるもの、絶対なるもの、真善美のために戦われてきた魂の足跡であるが、決してかかる秩序の軽率な味方ではなかった。

日本の復興には道義、秩序の恢復が急務だという。だが本来エゴイズムの道義にはよけいな理窟はいらないので、電車の数が多くなれば誰も押し合はずはなく、物が出廻れば闇屋はなくなる。物質の復興が急務である。もしそれ電車の中で老幼婦女子に席をゆずるときことが道義の復興であるというなら、電車の座席をゆずり得ても、人生の座席をゆずり得ぬ自分を省みること。下ら

ぬ親切は余計なことだ。人に親切にするなら小平や狼に殺されるのを自覚の上で親切をつくすこと。私は電車の座席をゆずって善人ぶり、道義の頹廃を嘆く人よりも、誘拐犯人の樋口の方をはるかに愛す。俺が帰京したところで娘は戻らぬという吉右衛門氏の言葉の方が重々もつとも千万なので、まさに御説のとおりであり、道義頹廃などと嘆くよりもまず汝らの心について省みよ。人のオセツカイは後にして、自分のことを考えることだ。



日本文学電子図書館

---

墮落論

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店  
昭和45年1月30日 改版3刷

---



日本文学電子図書館